

# 若狭塗

## 【産地組合】若狭漆器協同組合

### （産地紹介）

若狭塗は、江戸時代の初めに若狭湾のそばに位置していた小浜藩の漆塗りの職人が、中国の漆器作りの技術にヒントを得て、海底の様子を図案化して始めたものです。これに改良工夫を重ねて生まれたのが「菊塵塗(きくじんぬり)」で、さらにその考案者の弟子によって「磯草塗(いそくさぬり)」があみだされました。17世紀の中頃には卵の殻や金箔や銀箔で加飾する、という現在まで伝わる方法



が完成しました。当時の藩主がこれを若狭塗と名付け、足軽の内職として保護奨励したところから、「菊水汐干(きくすいしおぼし)」などの様々な上品で美しいデザインが考案されました。

若狭塗は、卵の殻、青貝、マツの葉、ヒノキ葉、菜種等を使って模様を作り海底の様子をあらわします。またそこには、星のように、あるいは宝石のように、金箔が光っています。手仕事なので、同じ品はありません。

蒔絵、沈金などと違い模様を先に入れ、その上に極上漆を数回塗り、石で研ぎ出しさらに木炭で肌を細かくする研ぎ出し模様が特徴で、全ての工程を分業ではなく、一貫して行うことも若狭塗の特徴です。